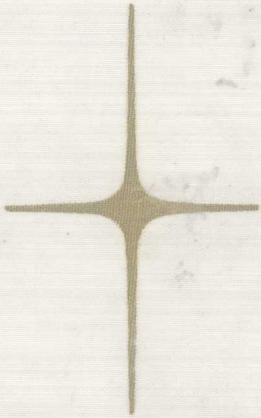

もし落丁、乱丁その他不良品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

10冊の本 10

くらしの伝統

定価 五五〇円

昭和四十四年五月二十五日 発行

編者 井上靖
臼井吉見

発行者 石川数雄

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一の六
郵便番号一〇一
振替 東京一八〇番
電話 東京(294)一一一一(大代表)

© 主婦の友社 1969 Printed in Japan

10冊の本 10

くらしの伝統

くらしの伝統／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

手仕事

手仕事の日本　柳宗悦…9
現代と民芸　水尾比呂志…57
白磁　岡部伊都子…75

紬に生きる人妻　草柳大蔵…87

庭をつくる人　室生犀星…99
職人かたぎ　長谷川如是閑…133
職人衆昔ばなし　斎藤隆介…159

衣・食・住

振袖・さまざまな足袋　幸田文…183
木綿以前の事　柳田国男…203

にっぽんの味　秋山徳蔵…225
今昔漬け物ばなし　本山荻舟…247

農家に伝わる心　和田　傳…263

四季おりおり

人間国宝——芸のひとたち　安藤鶴夫…287

民話をつくるはなし　木下順二…301

郷土玩具　永田久光…325

ことばの歳時記　山本健吉…339

やったりとったり　瀬川清子…365

〔詩〕流星／井上靖7　味噌汁／百田宗治56　蒼空／大木惇夫158
故郷へ／佐藤一英202　雪炎／河井酔茗246　旧大学生の詩／田中克己323　炬燵／勝承夫338　秋の夜／井上康文382
〔俳句〕春秋／中村汀女86　盲犬／村上鬼城182
〔短歌〕雉／古泉千樫324
〔グラフ〕秀衡椀1　和紙とたたみ131　伝統こけし261

解説

知恵としての伝統　樋口清之…383

流　星／井上　靖

高等学校の学生ころ、日本海の砂丘の上で、ひとりマントに身を包み、仰向けに横たわって、星の流れるのを見たことがある。十一月の凍った星座から、一条の青光をひらめかし忽焉とかき消えたその星の孤独な所行ほど、強く私の青春の魂をゆり動かしたものはなかった。私はいつまでも砂丘の上に横たわっていた。自分こそやがて落ちてくるその星を己が額に受けとめる地上におけるただ一人の人間であることを、私はいささかも疑わなかった。

それから今日までに十数年の歳月がたった。今宵、この国の多恨なる青春の亡骸——鉄屑と瓦礫の荒涼たる都会の風景の上に、長く尾をひいて疾走する一箇の星を見た。眼をとじ

井上　靖〔明治四十年（一九〇七）〜〕小説家。日本芸術院会員。北海道旭川の生まれ。金沢の四高、九大法文学部をへて京大哲学科卒。昭和十一年『サンデー毎日』懸賞小説に応募し、「流転」で千葉亀雄賞受賞。同年毎日新聞社に入社、もっぱら詩作と美術評論を行なった。生い立ち、小説家としての閲歴は、本全集第1巻を参照。詩集「北国」「地中海」ほか。

「流星」は、三十三年刊「北国」に収めたもの。

煉瓦(れんが)を枕(まくら)にしている私の額には、もはや何ものも落ちてこようとは思われなかった。その一瞬の小さい祭典の無縁さ。戦乱荒亡の中に喪失した己が青春に似てその星の行方は知るべくもない。ただ、いつまでも私の瞼(まぶた)から消えないものは、ひとり恒星群から脱落し、天体を落下する星というものの終焉のおどろくべき清潔さだけであった。

手仕事の日本

柳宗悦（やなぎむねよし）

柳宗悦（明治二十二～昭和三十六年（一八八九～一九六一））美術評論家、民芸研究家、宗教哲学者。東京生まれ。学習院をへて東大文学部心理学科卒。学習院在学中に武者小路実篤らとともに『白樺』を創刊。大正十二年、「神について」ほか一連の宗教哲学評論集をあらわし、やがてその目は日本の民間仏教信仰に注がれる。なお、英国の詩人、画家ウィリアム・ブレイクの研究が契機となり、日本の民芸に深い関心を示すようになった。これは日本に残っている手仕事の伝統発掘という生涯の仕事へのいとぐちとなる。昭和十年、東京駒場に日本民芸館を創立、民芸運動の総拠点とした功績は大きい。著書に「仏教と悪」「ウィリアム・ブレーク」「ブレークの言葉」「民芸四十年」等がある。

「手仕事の日本」は、昭和十五年前後の手仕事について、第二次大戦中に執筆、十九年刊「柳宗悦選集2」に収録されたものから抄録したものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

手仕事の国

あなたがたはとくと考えられたことがあるでしょうか。今も日本がすばらしい手仕事の国であるということを。たしかに見とどけたその事実を広くお報らせするのが、この本の目的であります。西洋では機械の働きがあまりに盛んで、手仕事の方は衰えてしまいました。しかしそれに片寄り過ぎてはいろいろの害が現われます。それで各国とも手の技を盛り返そうと努めております。なぜ機械仕事とともに手仕事が必要なのでありましょうか。機械によらなければ出来ない品物があるとともに、機械では生まれないものが数々あるわけであります。すべてを機械に任せてしまうと、第一に国民的な特色あるものが乏しくなってきます。機械は世界のものを共通にしてしまう傾きがあります。それに残念なことに、機械はとかく利得のために用いられるので、出来る品物が粗末になりがちであります。それに人間が機械に使われてしまうためか、働く人からとかく悦びを奪ってしまいます。こういうことが禍いして、機械製品には良いものが少なくなってきました。これらの欠点を補うためには、どうしても手仕事が守られねばなりません。その優れた点は多くの場合民族的な特色が濃く現われてくることと、品物が手堅く親切に作られることとであります。そこには自由と責任とが保たれます。そのため仕事に悦びが伴ったり、また新しいものを創る力が現われたりします。それゆえ手仕事を最も人間的な仕事と見てよいでありましょう。ここにその最も大きな特性があると思われます。仮にこうい

う人間的な働きがなくなったら、この世に美しいものは、どんなに少なくなってくるでありましょう。各国で機械の発達をはかるとともに、手仕事を大切にするのは、当然な理由があるといわねばなりません。西洋では「手で作ったもの」というと、直ちに「良い品」を意味するようにさえなってきました。人間の手には信頼すべき性質が宿ります。

欧米の事情に比べますと、日本ははるかにまだ手仕事に恵まれた国なのに気づきます。各地方にはそれぞれ特色のある品物が今も手で作られつつあります。たとえば手漉きの紙や、手轆轤の焼き物などが、日本ほど今も盛んに作り続けられている国は、他にはまれではないかと思われます。

しかし残念なことに日本では、かえってそういう手の技が大切なものだという反省が行き渡っておりません。それどころか、手仕事などは時代にとり残されたものだという考えが強まってきました。そのため多くは投げやりにしてあります。このままですと手仕事はだんだん衰えて、機械生産のみ盛んになる時が来るでありましょう。しかし私どもは西洋でなした過失を繰り返したくはありません。日本の固有な美しさを守るために手仕事の歴史をさらに育てるべきだと思います。その優れた点をよく省み、それをさらに高めることこそわれわれの務めだと思います。

それにはまずどんな種類の優れた仕事が現にあるのか、またそういうものがどの地方に見出せるのか。あらかじめそれらのことを知っておかねばなりません。この本は皆さんにそれをお報らせしようとするのであります。地方に旅をなさる時があったら、この本を鞄の一隅に入れ

てください。あなたがたの旅の良い友達となるでありましょう。

元来わが国を「手の国」と呼んでもよいくらいだと思います。国民の手の器用さはだれも気づくところであります。手という文字をどんなにたくさん用いているかを見ても、よくわかります。「上手」とか「下手」とかいう言葉は、直ちに手の技を語ります。「手堅い」とか「手並がよい」とか、「手柄を立てる」とか、「手本にする」とか、みな手に因んだ言い方であります。「手腕」があるといえば力量のある意味であります。それゆえ「腕利」とか「腕揃」などという言葉も現われてきます。それに日本語では、「読み手」、「書き手」、「聞き手」、「騎り手」などのごとく、ほとんどすべての動詞に「手」の字を添えて、人の働きを示しますから、手に因む文字は大変な数に上ります。

そもそも手が機械と異なる点は、それがいつも直接に心と繋がれていることであります。機械には心がありません。これが手仕事に不思議な働きを起こさせるゆえんだと思います。手はただ動くのではなく、いつも奥に心が控えていて、これがものを創らせたり、働きに悦びを与えたり、また道徳を守らせたりするのであります。そうしてこれこそは品物に美しい性質を与える原因であると思われます。それゆえ手仕事は、一面に心の仕事だと申してもよいでありましょう。手よりさらに神秘な機械があるでありましょうか。一国にとってなぜ手による仕事が大切な意味を持ちきたすかの理由を、だれもよく省みねばなりません。

それでは自然が人間に授けてくれたこの両手が、いま日本でどんな働きをなしつつあるので

しょうか。それを見とどけたく思います。

北陸

ここで道を北陸にとることといたしましょう。北陸道というのは、若狭、越前、これが福井県。加賀、能登、これが石川県。越中、これが富山県。越後、佐渡、これが新潟県。以上の七国四県であります。昔はこの地方を「越」の国と呼びました。日本海を差しはさんで露領と相対し、いわゆる裏日本の一部を成します。特に北の方は積雪の量がおびただしく、しばしば丈余にも達します。

若狭は狭い国でありますが、「若狭塗」で名を広げました。小浜町がその中心地であります。赤や青や黄や黒などの色漆と、金、銀の箔を塗りこんで、これを研ぎ出したものであります。時としては青貝もちりばめます。絵模様はなく一種の斑紋を一面に現わします。ここにこの塗りの特色がありまして、その兄弟とも見るべき「津軽塗」とともに世に聞こえます。多く作るのは箸、箸箱、盆、膳、重箱、硯箱、文箱などのたぐいであります。ここでも仕事の忠実な品は美しさをも保障しております。

越前の福井は松平氏の城下。また永平寺の国。ここの名は久しくその「羽二重」をもって聞こえました。中にはその名をはずかしめないものがありますが、その大部分は外国へ出すのでありますから、われわれの生活とは交わる面が限られております。それに大きな産業に進んだた

めに、機械を盛んに取り入れましたから、地方的な手機ものの味わいはありません。営利の仕事としては大きく、工芸の仕事としては小さいというのが実情であります。この県は優れた絹糸の産地としても名を得ました。

町として昔の面影をとどめているのは武生であります。往来の中央に溝が流れて両側に並み木が立つのは、昔の町の風情であります。この町は打刃物の鍛冶屋が多く、見ると灰均しや火箸などにも捨て難い趣きがあるのに気づきます。町の名をもつ「武生蚊帳」の名はよく全国に行き渡りました。質の良さを自慢とします。しかし越前の名を高めたのは、何よりも紙漉きの業であります。武生近くの岡本村がその中心をなします。立派な厚みのある「奉書」はここのを第一といいます。有名な「鳥の子」は今や海外でも、もてはやされている品。三椏を主な材料とします。きめ細かく滑らかなため、印刷の用紙として上々のものであります。日本には紙を漉く法が二つあって、一つを溜漉きといい、一つを流漉きといいます。前者はわが国では少ないのでありますが、「鳥の子」はこの法で漉かれます。日本の楮紙の多くは流漉きであって、これは外国にない特色あるやり方であります。つなぎに「とろろ葵」を用いる妙案は、だれの始創にかかるのでありましょうか。越前はたしかに紙の越前でありますが、しかし仕事が栄えると、とかく営利に走って、質を忘れる傾きが生じます。惜しいかな、越前の紙も、よい品ばかりではなくなりました。

この国のものとしてさらに二つの品を言い添えましょう。一つは氷坂と呼ぶ窯のことであります。那は丹生で村は吉野であります。福井や武生の陶器屋に行くと、この窯のものをよく見

かけます。壺や甕が主で、黒の胴に白の流釉を垂らします。陶器の窯の少ない北陸では、大事にされてよい仕事だと思います。他の一つは麻の織り物で、土地では「さっくり」と呼んでおります。働く時の着物として農家で作られます。多くは白と黒との細かい縞もので、ほかではあまり見かけません。調子のよい布であります。主に鯖江付近の田舎で作られますが、郷土の品としてだれに誇ってもよい布であります。

三国港はその昔、船簞笥の産地として名がありましたが、千石船がすたれるとともに、その歴史も終わりました。

さらに北に上れば加賀の国であります。金沢は前田氏百万石の城下町で、兼六公園でだれも親しんでいるところであります。ここはまた、能狂言と茶の湯の町と呼んでもよいかと思います。それほど人々に嗜まれているのであります。むかし曹洞宗の大本山総持寺のあった能登の国と、この加賀の国とを合わせ、今は石川県を成します。加賀第一の名物は「九谷焼」であります。伊万里焼と相並んで日本の磁器の双璧であります。藍絵の染め付けもありますが、特に赤絵で名を広めました。九谷焼は支那の影響を受けているためか、伊万里焼のような優しい美しさではなく、どこか大陸的な骨っぽいところがあります。絵にも格のはっきりした楷書風な趣きが見えます。仕事は江沼郡が中心であります。

九谷の色料ははなはだよく、素地の良さと相まって優れた品を生みます。ただ惜しいかな、赤絵の生命となる絵付けが昔ほどの格をもたなくなりました。そのため、どんなに見劣りがす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com